

スウェーデンの映画保存(下)

——“シネマテーク”の事業、映画をめぐる“協定”を考える——

岡島 尚志

Hisashi Okajima

連載:

フィルム・アーカイブ の諸問題 第50回

(承前)

*上映

シネマテークの広範で質の高い上映事業は、ストックホルム、イエテボリ、マルメで定期的に行なわれている。その運営には英国のBFIなどと同様に会員制度が採られている。番組編成は4名の委員会メンバーらが担当。ストックホルムの本部ビル、フィルムフェーセットにある二つの劇場は、スウェーデンの誇る二人の巨匠シェストレームとスティルレルのファーストネームを冠し、“ヴィクトル”と“マウリッツ”と名づけられている⁴。

番組は、www.sfi.se/cinematketでも知ることができる。

事業統計

会員数: 11,033
延入場者数: 71,198
年間上映回数: 1,139

会員数	延入場者数
2000年: 10,062	2000年: 68,606
2001年: 11,108	2001年: 68,997
2002年: 11,033	2002年: 71,198
年間上映回数	1回当りの平均入場者数
2000年: 1,128	2000年: 61
2001年: 1,120	2001年: 62
2002年: 1,139	2002年: 63

*図書室

国内唯一の映画専門図書室がシネマテーク内にあり、さまざまな図書室業務、調査・研究支援、書籍の貸出、インターネット閲覧サ

ービス等を行なっている。職員数は8名。ストックホルム大学映画学科と協力関係を結んでおり、映画図書館共同データベースMatinéがwww.sfi.se/matine上で運用されている。

所蔵統計

書籍数: 48,000
逐次刊行物数(総種): 1,200
逐次刊行物(定期購読): 200
脚本(自国): 2,100
脚本(外国): 8,200

訪問者数

2000年: 13,195
2001年: 16,959
2002年: 14,993

利用件数

	〔貸出〕	〔閲覧室内利用〕	〔図書館提携貸出〕
2000年: 9,766	[4,853]	[4,564]	[349]
2001年: 10,429	[5,761]	[4,261]	[407]
2002年: 11,257	[7,865]	[2,869]	[523]

*プレス・クリッピング

国内の日刊紙等に書かれた映画関係記事が集められ整理され、マイクロフィルム化されている。2002年5月以降は、ローカル・データベース内で索引化も行なわれている。職員数2名。

所蔵統計

作品記事数(件数): 54,000
人物記事数(件数): 16,500
データベース(索引化記事数): 5,500

*スチル写真・ポスター

国内外の映画に関連するスチル写真、ポスターが整理され、保管され、一般閲覧やメディアなどの利用にも供されている。職員数3名。1897年製を最古とするこれらのスチル写真は、物品としての価値が高く、貸し出しは行なわれないが、コピーは可能。

所蔵統計

スチル写真: 1,500,000
(スウェーデン映画[作品別]: 3,000、外国映画[作品別]: 30,000)
ポスター(作品別): 31,000

スチル写真複製依頼件数

2000年: 1,325
2001年: 1,170
2002年: 1,269

“映画協定”について

これまで見てきたように、スウェーデンのアーカイブ事業は、人口や製作本数の規模に比べて、きわめて大規模に——なによりも格段に多くの専任職員によって——行なわれているが、それを成立させているのが、国と映画テレビ業界との緊密な協力関係であり、そこから生れる潤沢な資金とりわけ豊富なマンパワーである。

スウェーデンでは、政府の許可のもと、国、映画業界(具体的には製作、配給、興行等の各団体を総称的に呼ぶ)、テレビ会社(前述の2局)の三者間で、「協定」が結ばれている(AgreementであってActではない)。始まったのはSFI創立の1963年からで、最新のものは「The 2000 Film Agreement」と呼ばれており、2000年1月1日から2004年12月31日まで5年間有効である。

三者からの資金はすべてSFIに集められ、SFIが定められた目的に支出する。以下、この「映画協定」の最新版をもとに、まず資金がどのように集められるかを見ていこう。

●政府からの補助金

国は映画協会に対して、議会の承認を得て、2億50万SEK(約30億5000万円)の補助金を供与する。協定三者以外からの支援は、新たな協約にもとづいて可能になる。

●映画業界からの支援

(1)映画館等からの上映料

映画館等興行者は、興行収入の10%をSFIに供与する。上映回数が週5回以下の常設館は徴収の対象外、また、子供向け上映、映画祭上映も対象外とする。こうしたスキームの細目は「映画配給検定機構」が定めている。映画協会側は、上映者の経理記録を閲覧することができる。支払いを怠った者にはフィルム配給者の供給リストから除外されるという懲罰規定が適用される。統計や関係者の発言等を総合すると、全体で年間約1億スウェーデン・クローナ[SEK](約15億円)以上が、目的税的に徴収されているのが現状ではないかと思われる。

る。なお、SFI発表の統計によれば、2001年度(12月期をのぞく)のスウェーデン国内映画興行実績は、以下のとおりである。

映画館興行実績(2001年1月～11月期)

興行収入:1,095,384,842SEK(約161億円)

* 前年同期:1,052,533,819SEK(約155億円)

スクリーン数:1,155

* 前年同期:1,129

鑑賞料金(一般/平均):70.11SEK(1,033円)

* 前年同期:67.53SEK(955円)

有料入場者数:15,624,624人

* 前年同期:15,585,994人

(2) スウェーデン映画製作者連盟からの寄付

製作者連盟は映画協会に対して、毎年その利益から最高200万SEK(約3000万円)を寄付する。

●テレビ会社からの寄付

スヴェリエ・テレビは、年間(少なくとも)3800万SEK(約5億6000万円)を月毎の補助金として映画協会に供与する。同様にTV4は、720万SEK(約1億6000万円)を供与する。関係者の話を総合すると、全体では年間約5000万SEK(約7億4000万円)が支出されているのが現状のようである。

上記の仕組みによってスウェーデン映画協会に集められた予算・基金は、以下の目的のために使われる。

1. スウェーデン映画の製作助成
2. 国内の映画配給・上映への支援
3. 映画に関連する文化諸活動への支援

資金の分配システムは、1～3が重なり合う部分もあって、かなり複雑であるが、シネマテーク代表ヤン＝エリック・ビリンガーからの情報を総合すると、現状(昨年度実績)では、大

まかにいって、60億円近くが集められ、自国映画製作資金に60%、上映・教育関係に20%、保存等アーカイブ事業に20%程度(10%はSFIの運営費等)が割り振られていると考えられる。アーカイブの保存関係費の内500万SEK(約7400万円)については、特にスウェーデン製カラー映画の修復・復元に使われることが明記されている点も興味深い。

重要なのは、SFIの総合的な——保存と公開利用を共に司る——アーカイブ部門であるシネマテークが、歴史的にもSFIという巨大な組織の基礎であり核になっているということである。集められた資金の多くは「お金」として映画製作というプロジェクトの支援に費やされるが、恒常的に働く人に費やされる部分で言えば、あくまでSFIとアーカイブ部門がその主要な先であることは強調しておく必要があるだろう。

最後に、過去4年間のスウェーデンにおける年間映画製作本数、SFIとシネマテークの年間予算(表1参照)と職員数(下欄)を記載しておきたい。

SFIの総職員数:150

シネマテークの職員数:52

国内の年間映画人口が1,600万人弱で、年間30本程度の自国長篇劇映画を生産する国の包括的な“映画協会”たるSFIの全スタッフ数に、そのアーカイブ部門たるシネマテークの職員が占める割合が3分の1強であること、SFIの総予算に縮減が見られた2003年度もシネマテークの予算は8000万円ほどの増加が見られることなど、さまざまな意味で興味深い数字であると言え得るだろう。

(主任研究官)

註

4 隣国デンマークのデンマーク映画協会が有する3つの映画劇場の名称も、それぞれ同国が世界に誇る映画人カール・ドライヤー(178)、アスタ・ニールセン(140)、ベンヤミン・クリステンセン(42)の名にちなんだものになっている(カッコ内は劇場の座席数を示す)。

表1

	自国長篇劇映画製作本数	SFI年間予算(円換算)	シネマテーク年間予算(円換算)
2000年	38	365,000,000SEK (約53億7000万円)	24,195,000SEK (約3億6000万円)
2001年	25	378,000,000SEK (約55億6000万円)	25,643,000SEK (約3億8000万円)
2002年	21	385,000,000SEK (約56億6000万円)	27,176,000SEK (約4億円)
2003年	27	382,404,000SEK (約56億2000万円)	32,400,000SEK (約4億8000万円)

今後の企画 NEXT...

大ホール Cinema 1

4月27日(火)～6月27日(日)

アジア映画——“豊穣と多様”

アジア諸国の映画の積極的な保存活動で知られる福岡市総合図書館との共催により、東南アジア・インドなどの国々から生まれた名作54本を選んで上映します。

インシアン(1976年)

7月6日(火)～8月29日(日)

日本アニメーション映画史

日本のアニメーション映画の歴史は、現存する作品だけでも1920年代にまで遡ることができます。現代の隆盛にまでつながる国産アニメの豊かさと楽しさを、フィルムセンター所蔵作品の総合的な上映を通じて探ります。

展示室 Gallery

[企画展]

4月6日(火)～6月27日(日)

7月6日(火)～8月29日(日)

造形作品でみる

岡本忠成アニメーションの世界

『おこんじょうり』(1982年)などの短篇作品で日本のアニメーションの歴史に大きな足跡を残した岡本忠成。人形作家保坂純子氏の協力を得て、映画製作で用いられた造形作品の数々を展示します。

[常設展]

展覧会 映画遺産

フィルムセンターがこれまで収集してきたコレクションの中から特に珍しい映画人の遺品や初期の映画機械を一堂に集めて展示する一方、過去に行われた映画の発見・復元の成果を紹介しながら日本の映画保存運動の軌跡を振り返ります。

*企画の名称、会期、内容等は変更されることがあります。